

第13回新潟肺癌研究会総会

日 時 平成元年 6月17日 (土)
午後 2時30分～5時50分
会 場 新潟グランドホテル

一 般 演 題

1) 3 cm以下の肺野孤立性陰影における
thin slice 高分解能 CT の検討

古泉 直也・佐藤 洋子 (新潟県立がんセン
清水 克英・小林 晋一 (ター新潟病院)
新妻 伸二 (放射線科)
横山 晶・木滑 孝一
栗田 雄三 (同 内科)
寺島 雅範 (同 胸部外科)
鈴木 正武・角田 弘 (同 病理)

3 cm 以下の肺野孤立性病変29例に対し thin-slice 高分解能 CT を施行し、その中で腺癌10例と炎症性病変9例について、形、辺縁の性状、spicula, notch、胸膜嵌入像、気管支透亮像、気管支血管系との関係について検討した。腺癌では、辺縁の性状、spicula、気管支血管の引き込みなどの特徴が thin-slice 高分解能 CT により明瞭に描出された。今後症例を集積し病理標本との比較を行うことにより、組織型、亜型との関連など更に高い診断能が示されるものと思われる。

2) 肺癌症例における MRI 所見の検討

斎藤 徹・島田 克己 (水原郷病院)
内科

CT, MRI が同時期に施行された肺癌症例12例の MRI 所見を検討した。MRI 装置は 0.5 テスラ超伝導 (横浜メディカル RESONA) を使用、SE 法にて T₁, T₂, 及びプロトン密度強調画像を撮像。主病巣は扁平上皮例で T₁, T₂ 強調画像でやや高信号を示す例が多かった。また、腫瘍中心壊死部分は T₂ 強調画像で明瞭な高信号として描出された。末梢2次変化を伴う症例は3例あり、T₂ 強調画像にて高信号を示し腫瘍部分と容易に区別可能であった。リンパ節腫大の描出は気管、血管系との区別が容易であり、冠状断の併用により縦方向の拡がりの把握も可能で CT にまさるものと思われた。左肺動脈浸潤を伴う扁平上皮癌例では MRI にて肺動脈の中断が明瞭に描出された。

MRI 装置はまだ発展途上にあるが、現時点で肺癌症例においてもすでにかかなりの部分で CT 以上の情報を

与えており、今後装置の開発、普及に伴ってますますその有用性が高まるものと思われる。

3) 胸腔内腫瘍診断における胸腔鏡の使用経験

山口 明・斉藤 憲 (国立療養所西新潟
土田 正則 (病院外科))

通常診断手段で確定診断が得られなかった①悪性胸水の患者、②縦隔腫瘍の患者、並びに、③対側縦隔リンパ節転移を疑われた肺癌患者に胸腔鏡を施行し、それぞれの患者で、腺癌組織や良性貯留液を採取することによって、また、肉眼観察によって、確定診断を得ることができた。胸腔内病変の診断が、X線等による画像検査、気管支鏡、経皮生検等によっても得られない場合があり、胸腔鏡が有用な診断手段となることがある。

胸腔鏡は侵襲的検査ではあるが、約 1cm の皮膚切開で施行でき、縦隔鏡や斜角筋前リンパ節生検と比較すると手術侵襲は少ないので、必要な場合は積極的に施行すべきと考える。

4) 内視鏡的肺門部早期癌の非観血的治療

○木滑 孝一・横山 晶 (県立がんセンター)
栗田 雄三 (新潟病院内科)

内視鏡的肺門部早期癌6例に対し非観血的治療を行った。全例男性で60才から84才、平均71才。BI は 400～1840、発見動機は肺癌検診3例、自覚症3例、X線所見はいずれも無所見であった。内視鏡所見は1例が多発例であったが、表層浸潤が4病変、結節隆起が2病変、表層浸潤+結節浸潤が1病変であった。治療は放射線治療単独が2例、CDDP 50mg+VDS 3mg の BAI に放射線治療を併用したもの2例、NdYAG レーザーに放射線治療を併用したもの2例、NdYAG レーザー単独が1例であった。2年9ヶ月、11ヶ月、11ヶ月、7ヶ月、6ヶ月、2ヶ月現在全例再発の徴候なく生存中である。今後も症例を選んでこれら非観血的治療を積極的に行なう方針である。

5) 放射線治療により完全寛解を得た CEA 高値の肺癌の2例

塚田 博・小田 純一
秋田 眞一・古泉 直也 (新潟大学)
酒井 邦夫 (放射線科)

肺癌・特に組織型として腺癌が他の組織と比較して、CEA 高値の陽性率が高く、その値は治療効果と相関があるとされている。

今回我々は、手術適応外とされた CEA 高値の腺癌